

熊本学園大学 外国語学部 第03号

英米学科 GAZETTE

平成28年12月
発行・編集
熊本学園大学 外国語学部

巻頭言

外国語学部教授 英米学科長 神本 忠光

大学教員の資格の変化

アメリカ大統領選では、大方の予想を裏切り、Donald Trump が第45代大統領に就任する見込みである。対抗馬の Hillary Clinton はかつて大統領夫人であり、上院議員、国務長官と誇りある経歴がある。Trump は実業家で政治経験はない。それにも拘わらず、接戦だったとはいえ、アメリカは Trump に今後4年間の国政の舵取りを委ねた。

この経験の有無が、大学の教員選考人事だったらどうだろうか。一昔前だったら、トランプ氏が選ばれる確率はまずない。しかし最近だったら、"game changer" 的な役割を期待され採用に結びつくかも知れない。

大学教員になるには、中学校・高校の教員の場合と異なり、免許や資格は要件ではない。文部科学省の規定によると、専門分野について、特に優れた知識及び経験を有すると認められる者、とある。昔日の一般的な大学教員選考は、一次選考の履歴書・研究業績の書類選考と、二次選考の面接が主であった。しかし、昨今の選考では、これに模擬授業が追加されている。論文などの研究業績はあっても、学生を指導できない

のでは困る。大学が大衆化した今、学者としての能力だけではなく、教育者として教える能力が、教員の資格として明確に求められている時代へと変わった。

トランプ氏選出は、同様なことがアメリカの政界でも求められている証左かも知れない。G. B. Shaw のある作品に "Those who can, do; those who can't, teach." とある。教師のそんな見方を覆す時代の到来の兆しが見える。



英米学科の最新ニュース

10月には本学西合志研修所で All English Weekend (週末を英語だけで過ごす「プチ留学体験」) が開催された。4名の留学生ほか、ネイティブ教員や学生を含む合計35名が参加した。

★11月には英米学科学生対象に第15回「スピーチ・暗唱コンテスト」が行われた。

★久しぶりに英語検定1級合格者が出た。

研究紹介

国際人の育成に関する研究

外国語学部英米学科教授 佐藤勇治

「国際人」とはどのような人で、どのように育成されるべきかを探求するのが、私の研究課題である。研究と言うと、普通はある特定の分野と内容を「狭く深く」というのが常識であるが、私の場合は様々な分野と内容を「浅く広く」学び、その延長上で国際社会に生きる人が備えるべき資質や能力、そしてそれらの育成方法を考察することにしている。

私の研究者としての歩みは、34年前に福岡県立筑紫丘高校の英語教師として働き始めた時点に遡る。この頃の主たる関心事は英語教育そのもので、4技能を育てる教材や指導法などが研究テーマであった。その後、福岡大学大学院修了後の3年ほどはアメリカ文学を研究し、主としてユダヤ系作家の作品における宗教と人の生き方の問題が関心の中心となった。30代後半からアメリカのミネソタ大学大学院に学び、それ以降はスピーチコミュニケーションと異文化コミュニケーションが主たる研究の対象となった。とりわけ、演説の構造や効果などのスピーチ分析、異文化コミュニケーションの各種内容の教授法を取り扱った。

近年は、世界大恐慌と第二次世界大戦という、二つのアメリカ

の国難を乗り越え、大統領として最長13年の在職暦を持ち、今でも多くのアメリカ国民に尊敬されている Franklin D. Roosevelt の演説の個別分析と、様々な演説の全体を通して見られる、彼のリーダーシップの研究を通じて、多くの人に感銘を与え、組織と人を動かす力とは何かを探求している。また、異文化コミュニケーションの延長上で、多様な人と物を含めた異文化世界の多面的理解のあり方を研究している。政治・経済や宗教や教育の思想と制度などのマクロ的視点と、衣食住文化のようなミクロ的視点の両方から異文化世界を理解する方法を探求している。

最終的な研究目標は、国際人たる人が備えるべき、「心と知識と技」は何で、どのようにそれらを育てていけば良いのかを明らかにすることである。通信と交通の高速化、相互依存関係の強化などから、世界は国境を越えた人と物の結びつきが今後益々大きくなり、とりわけ経済活動においては、一方では保護主義的な動きもありながらも、グローバル化が強くなっていくと予想される。このような動きの中で、多言語多文化多民族の背景を持つ人たちが、同じ組織で共通の業務目的のために協働することも増加するであろう。このような変化の中で生きていける、国際人の育成に尽力することが私の研究である。

学者への道程

外国語学部英米学科講師 渡辺 拓人

私の専門は英語学という学問の中でも特に英語史、つまり英語という言葉の変化や成り立ちを扱う分野です。「歴史」と言うとはや古くさいことをしているイメージがあるかもしれませんが、パソコン上でコーパスを検索したりデータを整理したりと、意外と(?) 現代的テクノロジーのおかげで発展している領域です。

英語史を専門にするようになったきっかけはというと、実は全くの偶然です。大学に進むまで、英語史という学問分野があることなど想像にすらありませんでした。ところが、入学後、シラバスを見ていたら英語史の講義内容が目にとまり、昔の英語はどんな風だったんだろうと興味をそそられま

した。おまけにちょうど良い時間帯に開設されていたので迷いもなく受講を決め、そこから英語史との長い付き合いが始まりました。まさかこれが自分の将来に繋がろうとは、当時思ってもみませんでした…。

その後は山あり谷ありでしたが、幸運なことに今も研究を継続でき、本学では英語史の講義を担当する機会にも恵まれています。英語史の面白いところは、たとえば綴りと発音の関係のように、今の英語で不規則に見えることでも歴史的に説明できることです。講義では、語学としての英語に加えて色々と勉強しないといけないのが学生にとってちょっとハードルとなっているようですが、少しでもこの面白さに気付いてもらえるように、毎年試行錯誤しています。

図書紹介

「イングリッシュ・モンスターの最強英語術」菊池健彦 (著)

外国語学部英米学科教授 林 日出男

海外経験を経ず、自室での学習(「引きこもり留学」と著者は言う)を中心に英語を学び、TOEICで990点満点を24回(現在は50回)取った著者の自伝的指導書である。個人の経験を基に英語学習方法を説いた本のほとんどがそうであるように、この本も外国語習得の学術的諸説は全く反映されていない。専門的・科学的背景を最大のより所とする私たち研究者からみれば、通常は最も勧めたくない書物である。それにもかかわらずここに載せるのは、この本がそれらの批判を飛び越えた領域のものだと思えるからである。著者の学習法は異常である。少なくとも当たり前の領域を超えている。私たちの多くは、自らの経験から国内で英語を身に付けることが如何に困難かを自覚しながら、当たり前の方法に終始して、それをマスターできずに終わる。我が国に居て英語を使

えるようになるということは、明らかに「当たり前」の現象ではない。その点で本書は、国内で英語を身に付けるには、「異常」でなければならない事を端的に教えてくれている。

(集英社、2011年、952円+税)



学会・調査報告

1. Remembering and Enacting the Atomic Bomb Blast at Nagasaki Atomic Bomb Museum
2. "Cool Japan Project" and Its Articulation of the Asia-Pacific War

外国語学部英米学科准教授 松島 綾

I presented two research papers at the 102nd National Communication Association in Philadelphia in November. The first paper analyzed the ways in which Nagasaki Atomic Bomb Museum constructs a subject position of victimhood. In particular it argued that the museum positions visitors not only as spectators of the exhibit but also as a part of the exhibit itself. Unpacking

the rhetoric of space and exhibition, the essay scrutinized the ways in which a subject position is established at the border of "seeing" and "being seen".

The second paper examined the Japanese government's "Cool Japan" policy and strategy to promote Japanese popular culture in Asia and analyzed the ways in which the government attempts to (re)position Japan in Asia. The essay also analyzed the ways in which the Cool Japan project utilizes the self-Orientalization by employing the Western gaze, and manifested the project's goal of promoting Japan as an exotic nation.

編集後記

熊本地震から早八ヶ月、師走となった。地震の影響がなかった建物を使い、授業はなんとか進んでいるが、被害があった建物の修復には時間がかかる。作業音で授業が邪魔されないようにと、大学当局は工事施工主と掛け合っているが、やむを得ない場合もある。熊本の教育機関はどこでも同じ境遇であろう。ご愛読頂いた皆様に感謝申し上げます。来年もご感想などをお寄せ下さい。We wish you a merry Christmas and a happy new year! (TK)

編集人 神本 忠光 (英米学科長)

〒862-8680

熊本市中央区大江 2-5-1

TEL: 096-364-5161 (代表)

Mail: kamimoto@kumagaku.ac.jp

